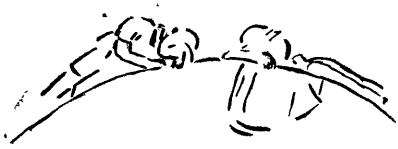
お遊戯会のあり方（三）

――幼児の実態から考えられるもの――

樋口三紀子



〈発表方法の再考　Ⅲ〉

衣裳・装置について

先日ある幼稚園に通っている女児の父親から、こんな話を聞いた。

「幼稚園のお遊戯会で子どもが何か踊るらしく、母親が袴を作るという。そこで幼い子どもにそんなものは必要ないというと、母親は更に必要ないことはわかっていても他の子どもが皆作ってもらうのにうちの子どもだけ無いのはかわいそうだというのである。なるほどそういわれてみると親として放っておくこともできず、またそんなつまらないことで子どもにみじめな思いをさせたくないから、ばかばかしいと思ってもできるだけのことはしてやりたくなる。」

こういった親のことばはお遊戯会の季節になるとよく耳にすることである。そして更に「同じつくるなら隣の○○さん

よりいいものを……」ということになるようだ。したがって後から作るものほど高価な衣裳になる傾向がある。その結果催されるお遊戯会がどんな状態になるか今更説明するまでもないであろう。子どもはむろん美しい着物を着ることを喜ぶかもしれない。しかし保育所の生活発表会にそれがどれだけの意味をもつものであろうか。日常セーターやズボンで走りまわっている子ども達に、長い着物、帯、袴或いは冠をつけ、お化粧をして窮屈な思いをさせている。子どもは表情をこわばらせ笑顔一つみせない。また、寒さのきびしい頃に薄い布で手足をみんな出してしまうような衣裳をつけているものさえある。寒さに震え、或いは窮屈な衣裳をつけて舞台に立つ子ども達はいったいどんな気持であろうか。

控室をのぞいてみるとたくさんの衣裳がおかれ着たり脱いだりの子ども達とその母親が入り交り混雑をきわめている。こうして頭から爪先まで念入りな衣裳をつけるために、子ども達も母親も控室にいる時間が非常に長い。しかも、劇、歌、踊りと三―四回は出演するため子どもも母親も準備におわれて他の子どもはもちろん自分の子どもの発表さえまともにみられない状態である。このような状態をみているといったい衣裳は何のためのものか理解に苦しむ。それにも増して理解できないのは、子ども達の生活発表は誰れにみていただくためなのかということである。先ほどの父親の話を聞いていても、またすでに述べたようなお遊戯会の実態をみていても、まず私が感じるのは保育者の意見はどうなっているのだろうかということである。このような傾向は保育者自身が望んだものなのか、保護者が望んだものか、また、保育者の意図が保護者に受け入れられなかったものなのか、いずれにせよこういった傾向をかもしだした責任の大半は保育者にあると思う。たとえ方法が間違っていても母親の子どもに対する思いやり、熱意には変りない。これらのエネルギーを子どものためにより有効なものにそそいでもらうよう保護者は考え、母親の協力を得るべく努力しなければならないと思う。

では幼児保育の立場から考えて、お遊戯会の衣裳・装置はどうあるべきか検討してみよう。日常子ども達の遊びをみていると衣裳・装置に値するものをよく使っている。ままごと遊ひをみていると、積木で玄関の戸を表わしたり、小さな板ぎれでテーブルを代用し楽しく遊んでいる。時には私のエプロンを借りにきて、小さなお母さんはいそいそとごちそうをつく

る。新聞紙で折った帽子をかぶった男の子達は、「先生、水兵さんよ」と積木のお舟に乗って大燥ぎをする。幼児は木ぎれや紙ぎれなどの単純なものを集めて工夫し、より複雑な遊具を創造する応用能力に富んでいる。そして複雑な遊具は彼らの遊びをより複雑な遊びへと発展せしめる。おとながみて何だか見当のつかない木ぎれ・紙ぎれが子どもにとって貴重な素材である場合が多い。これらの素材を工夫して、彼らが頭に描いたものにつくり上げようとする過程が、遊びとなり、経験となる。我々はとかくできあがりを気にして、衣裳にしろ装置にしろ子どもにとって工夫の余地なき完成したものを与えてしまいがちである。この点は大いに反省すべきことである。子ども達が日常遊びとして、工夫し作成した衣裳・装置は、おとなの作ったものに比較すれば数段の見劣りのするものであるが、それには幼児みずから創造したところの過程が折りこまれた貴重なものであり、生活発表に使用する意義はきわめて大きいと思う。幼児がものを工夫し創造していこうとする態度を養成することが重要なことは今更いうまでもないが、これを生活発表会の場にまで更に延長していくことが必要と思う。このように幼児の実態を眺めてみると、生活発表に高価な衣裳を必要とする理由はどこにもみあたらない。

役割について

次に役割について検討してみよう。配役をどうするか、主役は誰れにするか、お遊戯会が近づくと保育者にとって頭の痛い問題である。保育年数の多少を考えて役を割当てたり、発表能力の高低による場合もあり、その他もろもろの条件を考慮し、保育者は子ども達の役割を決めているようである。しかし、このもろもろの条件の中に多くのむずかしい問題が含まれているように思う。ある地方の例をみると「学校の先生のところの子は偉いから主役になっても仕方がないが、隣の酒屋の子がいい役で、うちの子がつまらない役になったのはどういうわけか。」と先日すでに終ったお遊戯会についてこんな不満の声がきかれた。また、ある幼稚園では、いい役がもらえなかったために転園した子どもがあると言う。いい役を獲得するために親達の事前運動も盛んなようである。こういった状態の中で保育者はどのような考えをもっているのであろうか。私は未だそれを確める機会を得なかったが、非常にあいまいなものであることは事実であろう。実際この役割

ということは、むずかしいことである。中には、ひとりが一回は主役として出演し、一回はわき役的なものに出演するように出演回数で補えば、役割を公平に扱えるという解決策を出している人もあるが、全員の合唱や、器楽合奏などを加えれば、ひとりが三―四回も出演することになり、子ども達の疲労の点から考えれば疑問がある。しかし、はっきり言えることは、子どもが主体であり、周囲のもろもろの条件に左右されることは間違いであるということである。

幼児は日常遊びの中で、すでに主役、わき役を演じている。幼稚園ごっこをみても先生になる子ども、園児になる子どもが彼らの中ですでに決められている。チャンバラごっこにも切り役と切られ役とが決まっており、また、ままごと遊びにも母親と父親と子どもと更に隣りの家族にいたるまで、彼ら自身の考えで役がきめられている。幼児の遊びにみられるこれらの役割はどういう過程を経て決められるか非常に興味ある問題である。配役について才配をふるっている子どもがまず主役になる。そして順々に役をきめ、時には自分で役を主張して選ぶ子どももあるが、一般に殆んどの場合表面的争いは比較的なく、円滑に決められ、実行されていく傾向がある。それは、彼らの集団の中に順位制が認められ、個人個人、集団における自分の順位をある程度認識しているからである。もちろん、この順位制は、身体的、精神的、知能的、行動的とさまざまなものがそれを決定する要因となっており、その順位は、遊びの内容によって異なる場合もあり、固定的なものではない。このように遊びの主役を演じている子どもには、その遊びを通して、積極的に遊びを発展させる態度、仲間を統率して自分の考える方向に進もうとする態度などをみることができる。また、遊びの中で、わき役を演じている子どもには、協調的な態度がいつのまにか、つちかわれているのを認めることができる。幼児教育にあたって、統率力並びに協調性の養成はきわめて重要なことである。しかし幼児の自由集団における個々の幼児をみると、それらのうちどちらか一方の性格だけが伸びている傾向がみられる。お遊戯会の主役、わき役の選定には、これらのことをも考慮しなければならない。すなわち、保育者は、保育時において、自由集団内で順位が低く、協調性のみ優れてきている子どもについては、何らかの形において主役をあたえ、統率力の養成と、自信をうえつけることに留意する必要があると思う。ま

た、自由遊び時に常に主役を果している順位の高い子どもについては、何らかの形において、わき役もやらせ、協調性の養成に留意する必要があると思う。お遊戯会における主役・わき役の決定は、単にお遊戯会を円滑に、かつ立派に行なうための配慮からのみ行なうのでなく、常に教育的立場からの考慮がはらわれなければならないと思う。

場所と時間

次に発表の日の場所と時間について述べてみよう。まず会場について、私の住む市の中心部にある公会堂か幼稚園のお遊戯会にしばしば利用されている。宣伝のためには最適の場所であり、また幼児の舞台度胸を養うにはいい所かもしれない。しかし純正な幼児の生活発表会を行なうには無理がありはしないだろうか。会場が広いことによって非常に派手な催しにはなるが、子どもの表情はよくみえず、せっかく大きい声ではっきりと発表できるようになった子ども達にマイクを与えなければならない。初めての舞台に立ち暗く遠い客席には、お友達も家族の顔もみえない。子ども達はどんなにか緊張しているにちがいない。生活発表会には子どもが日常と変らぬのびのびとした態度でのぞめるよう工夫したいものである。そのためには狭くても毎日遊び生活してきた場所で会をもちたいものである。子どもと保母とが家族を迎えるために部屋づくりをするのはとても楽しいことである。製作物を飾り遊具をきちんと片付けた部屋こそ、彼らの生活発表会場にもっともふさわしいものではないだろうか。

また発表時間についても、十分な考慮がはらわれなければならない。すなわち、特別な日として子どもの疲労もかえりみず、無理をすることは厳に避けるべきである。三回も四回も出演すると午前から午後まで、準備・出演と子どもは緊張の連続になる。これは子どもにとって実に大きな負担である。子どもに無理をさせるために、生活指導上好ましくない態度もみのがさなくてはならないこともある。生活発表の時間も彼らの成長過程の大切な時間であり、保育の流れの中であることを忘れてはならないと思う。保育者はできる限り幼児の出演回数を少なくし、負担を軽くしたいものである。一つの劇に、ある時には主役的に演じ、またある時はわき役として演じることも可能である。すでに実例をあげたように、歌あり踊りあり、会話あり、一つの劇で彼らの成長した姿を

示すのは、保育者の工夫で可能となる。そして楽しく演じ、楽しく見物することのできるよう保育者は考慮する必要があると思う。

〈おわりに〉

お遊戯会について、気のつくままに反省すべき点や理想を書き述べてきた。すでに立派な考えを実行していらっしゃる方々もあることと思う。しかしまだ、これまでに述べたように多くの問題をはらんだお遊戯会が行なわれていることも事実である。個々の保育者は正しい方向をみつめながらも、廻り道を余儀なくさせられているのではないたろうか。実際、保育にたずさわっている我々の前には、いつも心ない干渉・批判がたちふさがり、純粋に保育者として心に描いたはずの理想もすてて、おとな同志摩擦のない安楽な道を選びたくなるのも無理ではない。保育者として心にある矛盾を解決する勇気もなく、もっとも大切な子どもとの摩擦には目をつぶり、妥協してしまう。しかし、保育者のこういったあいまいさが結局、幼児の実態からかけ離れたお遊戯会が存在する原因となっているのではあるまいか。そしてその結果は決しておだやかなものてはない。保育者としての良心に割り切れぬ不満を感じ、子ども達はたいへんな負担を背負わされ、摩擦を避けたはずの保護者からは多くの不満の意が示される。

保育者にむけられる世間の目はきびしいがそれは保育者が幼児教育という大切な使命をもつゆえんである。いかなる難問があろうとも幼児教育の正しい道筋たけは、決してゆかめられないよう保育者がそれを守らなければならない。これは単にお遊戯会だけの問題ではなく日々の保育にすべて言えることである。幼児教育の理論は幼児とその背景となるものの実態から考え出されるものであり、それらの実態を認識した上てはじめて意味ある教育が行なわれるのではあるまいか。毎日幼児と生活している保育者こそ、それらの実態を追求し、それが幼児教育への正しい道筋であることに自信をもつべきだと思う。

（昭和三十六年十一月二十三日記・やわらき学園）

☆　☆　☆